

河北潟 かほくがた



NPO法人河北潟湖沼研究所通信

Vol. 15 No. 1



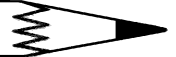
こなん水辺公園に自然解説員を配置

河北潟湖沼研究所は、今年度より金沢市への委託を受け、毎土日に金沢市こなん水辺公園に自然解説員を配置することとなりました。現在、理事会や友の会会員の協力の下に、複数の解説員によるローテーションを組んでいます。同時に、市民が河北潟の自然とふれあうためのひとつの拠点として、こなん水辺公園が活用されるように、さまざまなイベントを企画しています。

すでに、5月3日には、「河北潟の希少植物を育てよう」というイベントで、来園者らに水鉢に河北潟産の希少植物を植えてもらい、ミニ水生植物園をつくりました。6月7日と7月12日には、管理学習棟裏の水路に、石川県

絶滅危惧植物のミズアオイの移植するイベントをおこないました。管理学習棟の裏側には、この公園を建設したときに設置された細い水路がありますが、土砂で埋まったり、また外来種のチクゴスズメノヒエに覆われたりして、水路がほとんど見えない状態になっていました。この水路を何とか再生すると、外来種の除去と、希少な水草の生育場所を作りながら、また公園を利用する人にも公園に親しみを持っていただくという欲張った趣旨のもと、この場所の開墾とミズアオイの移植作業をおこないました。

当面1年間の活動を通じて具体的成果を示すとともに、この公園の改善のための提案をおこないたいと考えています。



第13回 ハッタミミズ

ハッタミミズは、伸びると1mにもなり、日本で一番長いミミズといわれています。河北潟の八田地区から名前がついた生物です。胃が数珠のようにつながっているので、ハッタジュズイミミズとも言います。現在、石川県の河北潟地域と滋賀県でしか見つかっていません。

環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種、滋賀県では要注目種とされています。石川県のレッドデータブックは1999年に編纂されましたが、このときにはハッタミミズのことがまだ良く調べられておらず、リストには掲載されませんでした。当時は外来種である可能性も指摘されていましたが、最近になって研究が進み日本の固有種であること、またたいへん希少な生物であることがわかってきました。レッドデータブックの改訂作業の中で絶滅危惧Ⅰ類となりました。

ハッタミミズは、おもに田んぼに生息する生きものですが、どのような田んぼでもいるというわけではなく、深い泥質の田んぼが適しているようです。つまり、湿田にしか生息できず、基盤整備事業のなかで乾田化された田んぼには、ほとんどみられません。また地元の話では、最近では昔のような大きなハッタミミズはみられなくなったということで、昨年おこなった私たちの調査でも、最大で60cm程度のものしか確認されませんでした。

ほ場整備は、河北潟の周辺の水田のほとんどに及んでおり、河北潟地域のハッタミミズは、絶滅の危機に瀕しています。生息数が多かった八田地区でも、現在ほ場整備作業が進行中で、一部の使われていない田んぼなどを除いて、今後の生息が見込めない状況です。そうしたなか、ハッタミミズの保全のための取り組みが始まっています。たとえば、金沢市の職員の方により、ほ場整備がかかる直前の田んぼで採集されたハッタミミズが、森本小学校で飼育され

カコちゃん かほくがた *
* ショウくん * ヌルドレン

み3



ています (2008年9月30日北國新聞)。

このような現状におかれているハッタミミズですが、地元での人気はなかなかのもので、とくに八田町の年配の人には愛着のある生きもので、昔はウナギを捕るための延縄の餌として、他の地区までハッタミミズを取りに行っていたそうです。地中にいてあまり姿を見せない生きものですが、ミミズ類の中で一番愛されているミミズかもしれません。最近では、地元テレビ局からハッタミミズの歌が流れています。

滋賀県では、ハッタミミズをはじめ田んぼ生きものにより付加価値をつけた米の生産もおこなわれています(「たかしま生きもの田んぼ米」<http://www.ikimonotanbo.jp/index.html>)。河北潟地域でもハッタミミズの居る田んぼをアピールする取り組みを考えたいものです。(文 高橋 久)

河北潟の湖面利用を考える集い 報告

NPO 法人河北潟湖沼研究所 高橋 久

河北潟は、フナ釣り、バス釣り、カヌー、水上オートバイ、ウェイクボードなど、様々なレジャー・スポーツがおこなわれていますが、特に最近、エンジンのついた装置を使ってのレジャーが増えています。河北潟は公共水域であり、また漁業権も消失しているため、湖面での船舶または遊具の使用にあたっては、特別な規制はありません。しかし利用が増えることによって、河北潟の自然が損なわれる可能性が考えられます。

河北潟には、毎年2万羽のガンカモ類が越冬しています。湖岸のヨシ帯は、石川県指定希少野生動植物のチュウヒをはじめ、オオヨシキリやカイツブリの繁殖場所となっています。またギンズナやコイの産卵場所にもなっています。モーターボートが高速で運航した場合、野鳥への直接的な驚異になることはもちろんですが、強い波が立つためヨシ帯の泥が洗われ、ヨシ帯が損傷する可能性もあります。

こうした問題を背景に、2009年6月27日に金沢市こなん水辺公園において「河北潟の湖面利用を考える集い」を開催しました。この集いは、河北潟湖沼研究所も参加する環境保全のためのネットワークである河北潟自然再生協議会が主催し、釣りやモーターボートのレジャーで河北潟を利用する団体や個人、行政関係者へ呼びかけて開催されたものです。

河北潟自然再生協議会では、約2年間、河北潟の湖面の利用のあり方とその中で河北潟の環境保全について議論してきました。その中で以下の2点を確認しました。

- 1) モーターボートの運行には、何らかの大胆な規制が必要である。とくに湖岸植生や野生生物が多い区域では、高速でのモーターボートの運行を禁止する必要がある。
- 2) 実際に規制する法律が無く強制的な規制は難しい。また強制力による規制よりも、利用者の合意のもとに自主的な規制をおこなうのが一番望ましい。そのために湖面利用のルール策定のための協議会を設置する

必要がある。

以上のような議論を経緯して、展開の見通しは不明瞭でしたが、さまざまな利用者をとにかく集めて話をしてみようと「集い」を計画しました。

呼びかけに応じた参加者は48名で、内訳は、釣りのグループ（フナ釣り、バス釣り）、カヌー・手こぎボートのグループ、ウェイクボードのグループ、NPO・野鳥専門家、農家・住民、行政となっています。それぞれの立場から活潑な発言がありました。動機の根源はそれぞれ異なるものの、河北潟を大切に思う気持ちは共通であり、河北潟を守ることはできるだけ協力したい、という発言が多く出されました。また、自然保護から何らかのルールが必要であるという点では、意見の隔たりはありませんでした。暫定的に、当面は河北潟自然再生協議会が連絡事務局となる、秋にもう一度話し合いをおこなう、当面の利用ルールとして、東部承水路や競馬場裏手など、野鳥の多いエリアはできるだけ利用を避けるということを確認しました。

河北潟と河北潟地域の将来像を考える上で、河北潟の湖面をどう利用するのかということは重要な問題です。今回の取り組みは、地域の人が河北潟をどう見るのか、河北潟とどう向き合っていくのかという、将来の方向性を考えるひとつの機会になるのではないかと思います。発言を聞いていて、河北潟の実際の利用者は、これまで河北潟をよく見てきており、その問題点や環境悪化の経過も知っていますが、何よりも現在の河北潟を大切に思っており、保全を図ることを第一に考えていることが分かりました。振り返って地方行政の施策をみると、現在の河北潟の環境悪化と未利用のみが強調されている嫌いがあります。水質改善のための小手先の技術の導入でお茶を濁したり、自然環境破壊を伴う活用のための施設建設のみがとり上げられているように思います。河北潟の将来の施策において、まずは今の河北潟をよく見て再評価する必要があることを感じます。

第9回 潟端の漁の終わり

河北潟の東側に位置する集落、^{かたばた}「潟端」で暮らしてきた昭和4年生まれの坂野 巖さんに、水郷の景観がひろがっていた1950年代頃までの潟端の自然と人の暮らしについて聞き書きしています。

ボラの大漁、うがい漁の終幕

潟端のくらしは米づくりが主体でしたが、農閑期には川や潟で漁をして、日々の食事をまかなくなっていました (vol. 14-1～14-4 参考)。

湖岸に寄りついた魚を捕る“うがい漁”は、毎年8月の終わり頃に盛んでしたが、農薬が使われ出してから行われなくなりました。うがい漁を止めた1～2年くらい前に、ボラが大漁だったことがありました。

いつの年か定かではありませんが、8月29日のお祭りの前夜のことでした。一通り漁をして、「魚も捕れたし、そろそろ帰る頃やなあ。」と思っていると、ボラの群れに出会しました。ボラの大群が逃げ回って、10～20匹のボラがあっちこちの水面から噴水のように跳ね上がるのです。跳ね上がったボラが落ちたときに、頭や背中、肩や腰などにぶち当たりました。うがいの中にも入ってきて、ゴフゴツと大きな手応えがあった感触がいまでも残っています。一度に5～6匹のボラがうがいの中に入り込んできて、1回の漁で一人15～20匹ものボラが捕まえられました。もう一回やろうと、続けて漁を行いました。今度は誰も捕れず、ボラの群れは通り過ぎていったようでした。大漁の喜びで捕れた魚の重さも苦にならず、その日は皆気持ちよく家路につきました。

翌朝になると、昨夜のボラ大漁の話題で隣近所盛り上がっていました。最もたくさん捕まえた人のボラの数は、25匹だったとの話でした。「ボラが一晩の漁で、一人平均17～18匹も獲れたことは覚えがない。」と、お年寄り達が驚くほどで、まったく不思議な出来事でした。漁に出ていた人数は忘れましたが、20人ほどはいましたので、一人15匹捕った計算でも、300匹のボラが獲れていたことになります。

ボラは大きさによって呼び名があり、一年ものはチョボとかロンチョ、全長25cmくらいの二年ものはイセゴイとかニサイ、体長30～40cmのものをボラ、体長50～80cmの大きなものは外洋にいて河北潟では見かけませんでした。

うがい漁では、フナやナマズ、ボラ、スズキなどが捕れましたが、最後の方には大きな蛙(ウシガエルかヒキガエル)が捕れることが増えました。蛙を食べる習慣がありませんでしたので、うがいの中に入れていても残念なもので、よく見ずに陸の方へ放り投げていました。

農薬と除草剤の普及

河北潟の近くに位置する潟端は、泥地で米づくりに適した環境ですが、農薬がない時代は、ウンカの害(稲の液を吸い枯らす)と、天候不順で発生するイモチ病に大変苦心しました。当時の稲の品種は「^{のりりんいちごう}農林一号」(1931年・昭和6年に稲で初めて農林登録された)と呼ばれ、^{こしむせ}多収量品種で美味しいお米でした。戦後は、「越路早生」という品種が普及し、これは食味が良いうえ、病気や倒伏にも強いので喜ばれました。

越路早生と同じ頃、病虫害に対する農薬「BHC」(ベンゼンヘキサクロリド(日本の農薬登録期間:昭和24～46年。毒性・残留性があることから日本全国で販売禁止される))が入ってきました。当初は手動式の道具で農薬を撒いていました。そして、BHCを使い始めてから6～7年後くらいに除草剤が入ってきました。

除草剤が入る以前、田んぼの草で苦になったのは、ヒエ(イヌビエ)とガメザラ(ミズアオイ)でした。取っても取っても生えてくるガメザラは一番の難敵で、これが除草剤でなくなったので楽になり、田んぼがすっきりしました。また、

砂が多く混じっている痩せ地の田んぼでは、ガメザラよりもミツカド（カヤツリグサ科のミズガヤツリ？）という雑草がたくさん生え、苦勞の種でした。ミツカドは地下茎をのぼして塊茎（そこからまた新芽を出す）をつくるので、草を抜くだけでなく、土の中に残る塊茎も取り除きました。6月の草取りのときは、腰にイコ（竹籠）を付けて作業し、その中へ入れました。イコにたまった塊茎は、他所の田んぼや水路に拡がらないよう各自で燃やしました。

潟や川の魚を食べなくなった時

農薬により虫がつかなくなり、除草剤の使用で草取りの手間が減り、その後農機具の導入で牛馬が使われなくなりました。小型耕耘機を使い始めたのは昭和32年頃です。そうして段々と米が楽に穫れるようになっていき、嬉しく感じていました。

しかし、その一方で、毒におかされた魚が現れるようになり、身に危険を感じていました。除草剤が使われ出した頃から、まず川にたくさんいたヒルが2～3年の間にいなくなりました。それまでは川に入るとすぐに、ヒルが何匹も寄ってきました。足に巻いているキハンの間から入りこまれ、よく血を吸われたものです。たくさんいたヒルが姿を消したのには驚きました。そして、メダカも見られなくなりました。メダカは大量に死んで、川の淀んだところに死骸が集まって浮かんでいたこともありました。

畦に穴を空けるので厄介がられたザリガニ（アメリカザリガニ）も一時期たくさんいましたが、除草剤がよく使われるようになった頃から目立たなくなりました。結局ザリガニがいたのは終戦から2～3年の短い間だけでした。たくさんいた頃は、とくに排水用の小川にみられ、南蛮（唐辛子）が散らばっているみたいに赤いのが見えました。ライギョは終戦後にみられるようになりましたが、ライギョが増えてきた頃、フナやメダカなど他の魚が少なくなりました。そしてその後、変形したライギョが現れるようになりました。最初は、機械か何かに挟まったのだろーと思っていましたが、農薬による影響ということがわかってきました。ちょうど河北潟の干拓事業がはじまった頃と重なり、背骨が曲がったライギョとか、片目が白くなっていたり、鱗にカビが生えているようなフナなど、奇形の魚が目立ってみられました。奇形の魚は動きが鈍くて簡単に捕まえられるため、捕りに行く人もいましたが、捕ろうという気持ちになれませんでした。

気味の悪い姿をした魚の話が、人から人に広まり、残留農薬の問題も話題となって、魚を食べない方が良いという風潮が生まれました。川に魚がたくさん上がってきても、見て見ないふりをするようなもので、網を持って出ることもなくなくなりました。魚を捕る人はほとんどいなくなり、淡水魚を全面的に食べなくなりました。

（聞き取り・文 川原奈苗）



潟端では“ガメザラ”と呼ばれていた（正式和名：ミズアオイ（田んぼや水路に生える水生植物））
除草剤が使用される以前、田んぼにたくさん生えていたガメザラ。秋頃、田んぼに残っているものは背丈10～15cmほどで、薄紫色の花を咲かせた。排水路にあるものは大きく生長し、30～50cmほどあった。
＜写真左：河北潟干拓地のハス田にて撮影（2004年） 写真右：須崎町の水田脇の排水路にて撮影（2004年）＞

ここからは2006年の第2回モンゴル視察の記録となります。

2回目のモンゴル行きの記録は、前回とは別の地域、問題を取り上げます。前回に見たのは、主としてモンゴル国の南部を占めている、ラクダの群が放牧されているゴビ砂漠でした。それは私にとってはアジア内陸部の高原地帯を知る得難い経験でしたが、やはりモンゴルの一部の印象に限られています。

第2回の2006年には、遊牧民であるモンゴルの人たちがその生活の中心となっている大型家畜（ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ヤク）の群と暮らしている中部草原地帯を見ることが出来ました。

日本全土の約4倍の面積を占めるというモンゴル国は、大きく分けて国のほぼ半分を占める南部がゴビ砂漠、北部の3割がシベリアに続く森林地帯で、その間を帯のように草原地帯が走っています。遊牧の民モンゴルの人たちが生活しているのは主にこの草原地帯です。

前回と同様に、日記風に日を追って、書いてゆきます。

2006年8月26日（土）

午後4時頃小松空港発、韓国の仁川空港で乗り換えてウランバートルに着いたのは、深夜の27日0時頃だった。仁川からウランバートルまでの大韓航空機はエアバスA300-600型の新しい機体で、室内はきれいに整備されていた。ウランバートルの空港には、近頃は日本の主な空港ではほとんど見かけない高翼双発のフォッカー・フレンドシップ機が2機、駐機していた。私は東南アジアやシベリアでたびたび乗ったことがあるこの飛行機を見て、たいへん懐かしく思った。ちなみに小松から仁川までの便は、同じ大韓航空のボーイング737-900型であった。

去年もお世話になったドルジさんの出迎えで、市内のフラワー・ホテルに着いて、寝たのは27日の2時頃。

8月27日（日）

よく晴れて午前7時半の気温は13度。

この日は昼頃まで休み、ホテルで昼食をしながらモンゴル側の人たち4人と日本側の3人が、これからの視察予定などを打ち合わせる。この日は午後ウランバートル郊外のトール川の岸のホルフレーにある計画中の環境教育施設を見にゆく。ウランバートル市街から北の郊外に出て、トール川にかかった長い橋を渡って、やや高い丘陵の麓の道を西に進む。途中の岡の中腹に、ハルハ河戦争（日本ではノモンハン事件として知られる）の戦勝記念の記念碑と公園がある。

東西に走る丘陵の麓の道を川の上流に向かう。この先に観光・リクリエーションのためのキャンプ地があるために道はかなり整備されている。橋を渡ってから数キロ行くと、環境教育施設の予定地のホルフレー農場に着く。左手は川幅数10メートルのトール川、右手は道から100メートルほど高くなっている丘陵が連なる。上のほうが丸く、なだらかな丘陵は麓から中腹までは浅い緑の草原で、その上の稜線までは黒っぽい針葉樹の林になっている。丘陵の下部が草原、上部が森林になっている。モンゴル中部草原地帯では普通に見られる景色である。私はこれが自然の出来た植生ではなくウシやヒツジの放牧で出来たものではないかを感じる。牛馬などの放牧がほとんど発達しなかった日本の里山では、下部が森林、上部が草原でこの景観と逆になっている。

草地の中に浅い谷間のようにになっている部分があり、その底には大きな石がゴロゴロしている。雪解けの時期にはこの谷間を水が流れて、トール川に流入するのではないかと思われる。雨がほとんどない夏の終わりの現在でも、この谷間に沿って地下水が流れてトール川に入っているのだろう。

ホルフレー地区については、翌日の28日と9月1日にさらに詳しく見てまわったので、その内容は28日の記録で詳しくのべることにする。

ホルフレー地区の近くにある観光客のためのグル・キャンプにあるレストランで夕食をしてホテルに帰る。このグル・キャンプはやや高みにあって、トール川を隔ててウランバートル市街がよく見える。白いグルや木造のコテージが20ほどと、やや大きなレストランやバスルームらしい建物、倉庫らしい大型コン

テナーなどが、緩やかな丘陵の麓に配置されている。グル・キャンプの下手、広々とした草地では、ウランバートルから遊びにきているらしい40人ほどのモンゴルの若者たちが、バスケットボールに興じている。

今度の旅でウランバートル市の我々の宿舎となるフラワー・ホテルは、日本に滞在した経験がある人の経営する日本人向けのホテルで、フロントでも日本語がかなり通じる。日本風の大浴場があって外国にいる緊張が癒される。泊り客は韓国人が多いようである。



環境教育研修施設予定地 ホルフレー農場



ホルフレー地区からウランバートル市を望む

こなん水辺公園より～河北潟ミニ植物園～

古民家を移築した管理学習棟は、こなん水辺公園のシンボリックな建物ですが、この建物の入り口と左手に、いくつかの水鉢が置かれています。まだ整備中で、説明書きもありませんが、これは、河北潟と周辺に自生しているか、かつて自生していた水生植物を移植したものです。「河北潟ミニ植物園」と名づけています。一見ただの雑草ですが（実際にもそうですが...）、今では大変貴重な植物も含まれています。いずれ説明版を設置したいと考えています。今は、小さな名札がついていますので、それで名前を確認できます。6月にはヒツジグサが花を咲かせていました。これからは、アサザの黄色い花が見られるかもしれません。



ヒツジグサ お昼頃開花しました。

イベントのご案内

大浦小学校による
こなん水辺公園の外来種除去作業

日時 2009年7月28日 9:00-10:30
場所 こなん水辺公園（金沢市東蚊爪）
内容 大浦小学校の5、6年生が外来種についての講義を受けた後、園内のチクゴスズメノヒエやセイタカアワダチソウなどの外来植物の除草作業をおこないます。約100名が参加する予定です。河北潟湖沼研究所からは高橋久理事が講義や指導をおこないますが、参加人数が多いため、チクゴスズメノヒエの除草活動の経験のある方のご協力をお願い致します。

第67回河北潟自然観察会



日時 2009年8月2日 17:00～20:00
集合 藤木農園（河北潟干拓地内←お問い合わせください）
内容 簡単なバーベキューなどで腹ごしらえして、夕方から野鳥のツバメのねぐら入りを観察します。（参加費1000円、食材はできるだけ地産地消とします）

第20回いしかわ環境フェア

日時 2009年8月22日（土）～23日（日）
場所 石川県産業展示館3号館
※ 河北潟湖沼研究所もパネルなどの展示を行います。準備のため8月21日にお手伝いいただける方を募集します。

編集後記

発行が遅くなりましたが、今年度の第1号をお届けします。これまでは河北潟湖沼研究所友の会からの発行となっていましたが、今号からは発行元が河北潟湖沼研究所となります。友の会の独自の活動を活発にすることを目指しており、友の会スタッフによる活動情報等を盛り込んだニュースレターの発行等を検討していきます。

河北潟湖沼研究所も活動の幅が少しずつ広がりが出てきましたが、実働部隊のスタッフが相変わらず不足しています。活動に興味がある方は、ぜひご連絡ください。（高橋）。

